「平和の俳句　1」　2025 年 8 月 18 日

「東京新聞」は、敗戦月の 8 月に恒例の「平和の俳句」を掲載している。平和を願う人が多いということだ。私も恒例のように、二回に分けて、心に残った句を紹介したい。

「平和とはあんぱんのかほ欠けぬこと　高田大介（38）　相模原市緑区」やなせたかしの漫画『アンパンマン』は、主人公アンパンマンが飢えた人に自分の顔を食べさせる自己犠牲愛を描いて、人気を博した。高田氏は、アンパンマンの顔が欠けることのない、皆が食に満たされた状態が平和であると詠う。イスラエルに攻撃されたガザでの、飢えて死んだ子ども、また骨と皮だけの子どもたちの映像が流される。停戦し、食料と医薬品の搬入をひたすら願う。私の友人が「ガザの子にこのひとさじのシャーベット」と詠んでいるのを知って、全く同感した。「戦争を決めるは男夏に入る　鶴巻幸子（79）三重鈴鹿市」選者のいとう氏は「男ばかりが戦いを勝手に決め、勇ましい言葉で自分たちを鼓舞する。その彼らの夏が来た。止めねばならない」と評する。戦争は、いつも威勢のいい男たちのかけ声によって始まる。兵士や国民は塗炭の苦しみに遭う。しかし、戦争を始めた彼らは戦場に行くことはない。政治家たちは、強くて勇ましい姿を見せつけ、国民の支持を集めようとする。本当の強さは、弱くさせられている人を支え、生かすことである。アフガニスタンで、荒れ野に水を引き、緑の農地に変えた中村哲氏は、武器では平和は作れない、食糧を生み出し、共に食するところに、平和があることを実践した。それが本当の強さであると教えてくれた。「罪なき児生きる術なく夏のガザ　日比史朗（93）愛知県一宮市」私を支え、生かしてくれた聖書を書き遺したイスラエルに関心があるので、毎日、イスラエルとガザに関する報道を見聞きしている。旧約聖書では「目には目を、歯には歯を」と報復することを認めている。これは、やられた分だけはやってよいという、報復をエスカレートさせない歯止めの律法である。23 年 10 月 7 日、ハマスはイスラエル人 1200 人を殺害した。認められることではないが、これに対し、イスラエルは 6 万人以上のガザの住民を殺害している。50 倍を超す、異常報復である。食糧を求めて集まった配給所に発砲して殺害するのは、もはや戦争ではなく一方的な虐殺以外の何ものでもない。歯止めをかけない米国の異常さを思う。「ヘッドライトに蝉の特攻慰霊の日　中嶋倫夫（75）浜松市中央区」明るいヘッドライトに飛び込んでくる蝉を見たからといって、米軍艦を目指して突っ込んでいった特攻を連想するのはあまりないだろう。中嶋氏は慰霊の日であったから、特攻のことが頭から離れず、思わず、蝉と特攻がダブり、悲しんだのではないか。記録映像では、特攻兵たちは別れの杯を粛々と飲んでいるが、気分を高揚させるためにヒロポンを打たれていたとも言われている。片道分だけの燃料を積んだ戦闘機の中で一人になった時、彼らは何を思ったであろうか。想像するだけで、息苦しくなる。残酷無比な死に、どうして追い込んだのかを問いつづけることが、彼らへの慰霊ではないか。「帰還した叔父は十七年ひきこもり　井土英子（78）愛知県阿久比町」戦争で過酷な体験をし、PTSD（トラウマ）を負い、引き籠もったのである。戦時中は「日本軍人には、そのような精神軟弱な者はいない」と伏せられたが、帰還した兵士には、大酒を飲み、家族に暴力を振るう人がかなりいた。そういう父が死んでくれてホッとしたとある女性が書いていたが、その後、戦争トラウマでの苦しみであったことを知り、同じような家族の救済に奔走するようになったという手記を読んだことがある。人を殺し、痛ましい状況を見れば、病を負うことは当然である。井土さんの叔父は、長い時を経て、弁護士活動に復帰したと言う。戦争が生み出した苦悩であることに間違いない。人は他人を殺してはいけないように造られているのではないか。